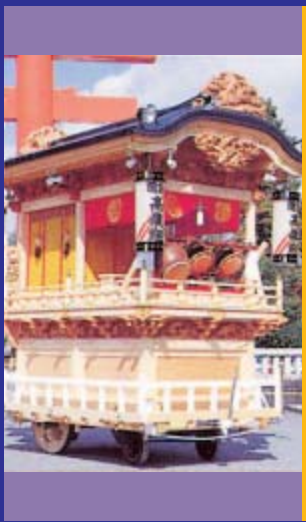




湧玉宮本



湧玉羽衣



湧玉高嶺組



湧玉二の宮



磐穂天和連



咲花組



磐穂阿幸地



磐穂常磐連



湧玉神賀

【富士山本宮浅間大社】

浅間大社は、大同元年(806年)征夷大将軍坂上田村麻呂が、富士宮市山宮の地から遷宮建立したもので、全国に1,300余社ある浅間神社の総本宮で、平成18年に御鎮座1,200年を迎えた。祭神は木花之佐久夜毘売命(コノハナノサクヤヒメノミコト)で、火難消除、安産、航海、漁業、農業、織維などの守護神として特に知られている。本殿、拝殿、楼門などは徳川家康の建立寄進のもので、本殿と拝殿は弊殿によって結ばれており、二層から成る本殿の上層は高欄付き回り縁をめぐらした楼閣風の美しい建物で、この建築様式を浅間造りと称し、本殿は国の重要文化財に指定されている。楼門の脇にある隨身像は慶長19年(1614年)作である。



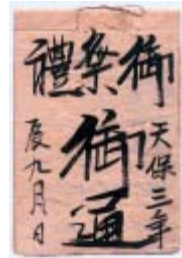
本殿脇にある湧玉池は、後方にある神立山の溶岩の山肌から富士山の雪解け水が湧き出して形成された池で、国指定特別天然記念物となっている。平安の歌人、平清盛が「つかうべき数におとらん浅間なる御手洗川のそこにわく玉」と詠じたこの池は、四季を通じて水温が摂氏14度、湧水量も一日約20万トンと豊富で、市内を流れる神田川の水源となっている。



湧玉琴平

【富士宮秋まつり】

富士宮秋まつりは、浅間大社の秋の例大祭の付け祭として、氏子町内が約20台の山車・屋台を引き回し、収穫と一年の無事を感謝するもので、毎年11月3・4・5日に行われ、勇壮な囃子の競り合いが売り物になっている。祭の歴史は、記録や資料に乏しく、定かではないが、江戸時代末期の商人日記である『袖日記』(市指定有形文化財)には、万延元年(1860年)7月6日の「東町若イ衆家臺出ス……家臺明七日社領を引。」や文久2年9月11日の「今夜半若イ者神田橋ニ於てダシ俄の儀……」の記述があり、「家臺(屋台)」や「ダシ(山車)」が江戸時代末期すでに引き廻されていて、祭を行っていた事が分かる。また、天保3年(1832年)9月と書かれた咲花組の祭典御通帳が残されている。



江戸時代の大祭礼は、4月と11月の初申と9月15日に行われていたが、明治6年の改暦から、その年の新暦11月4日が庚申であった事から、毎年11月4日を大祭と定め今日に至る。明治中期、祭を実施していたのは「湧玉」「磐穂」「咲花」といった祭組にすぎないと言われており、「湧玉」は親名として現在でも神田川以西の祭組に使われている。【11月3日宮まいり・引き回し】浅間大社拝殿にて各祭組が祭の安全を祈願し、参拝を行う。修祓、玉串奉典、富士宮囃子の奉納が行われ、御幣を受領し各会所に戻り山車・屋台の運行を始める。

富士宮秋まつり

【11月4日勢揃い・引き回し(共同催事)】
【11月5日引き回し】



全ての山車・屋台が、浅間大社前の目抜き通りに勢揃いし、祭典・一斉囃子・競り合い・手踊り等を行う。祭組によって実施が異なるが、各祭組の山車・屋台は自町内の引き回し・競り合い・手踊り等を行う。祭典終了後は、浅間大社に御幣を返納、祭典の無事に感謝し参拝を行う。

【富士宮囃子】静岡県指定無形民俗文化財

富士宮囃子の起源については、明治時代に根古屋(静岡県沼津市)から囃子方を招いて祭を行った事から、根古屋から伝えられたという説や、その他諸説は多くあるが、現在まで明らかになっていない。曲の調子・曲名等から関東の囃子(和歌囃子など)に起源がある可能性があるが、どの様な経緯で富士宮に伝わってきたのかは、不明である。現在、富士宮囃子において演奏される曲目は、歩行時に演奏される囃子と、山車・屋台上で演奏される囃子の二つに分類される。宮まいり等での歩行時には「道囃子(籠丸)」「通囃子」「宮まいり」などが囃され、山車・屋台の引き廻しには、「にくずし」「屋台」「昇殿(聖天)」などが囃される。「にくずし」は山車・屋台の引



き廻しの際に主に囃される曲で、「屋台」は競り合いの際に囃される曲である。特に「屋台」は、競り合いをめぐり喧嘩沙汰が多かった事から、別名を喧嘩囃子とも呼ばれている。「昇殿(聖天)」は、かつて競り合いに勝った組が山車・屋台を進める際に囃したと言われていた。

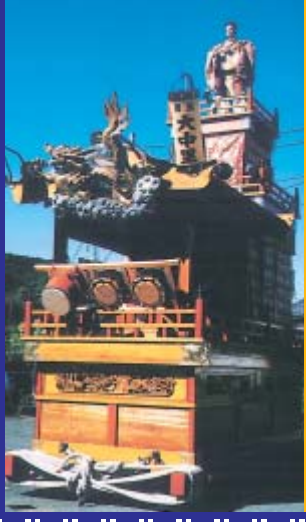
富士宮囃子の基本的構成は金胴(締太鼓)2人、大胴(長胴太鼓)1人、笛(篠笛)1人、鉦(当り鉦)1人の五人囃子であるが、必要に応じて笛・鉦は増員される。基本のリズムは金胴が刻み、大胴は、金胴の合間に緩急をつけながら演奏する。笛は唄を吹きながら、全体の主導権を握っていて、曲の切り替えや終了の際には、合図となる唄を入れる。鉦は金胴と共にリズムを刻んでいるが、競り合いの際には相手の囃子の調子を狂わすべく、相手の山車・屋台に接近しながら演奏する。浅間大社の神田川を境に、東「磐穂」、西「湧玉」に分かれていて、曲調・奏法に若干の違いがある。本来、競り合いはすれ違うのもままならぬ狭い道で、どちらが道を譲るかを囃子で競ったもので、負けた組は山車・屋台を引き下げて道を譲り、勝った組は昇殿(聖天)を囃しながら山車・屋台を進めたと言われていた。現在では、競り合いを行う各組(連)により、事前交渉が設けられ、細部について取り決めを行っている。祭りの後継者である子供達を育成するにあたり、囃子の技術的な部分と競り合いの礼儀作法をあわせて指導しながら、後世に伝承している。



磐穂瑞穂組



磐穂浅間連



湧玉天中里



湧玉神豆



湧玉福地豆組



湧玉責船



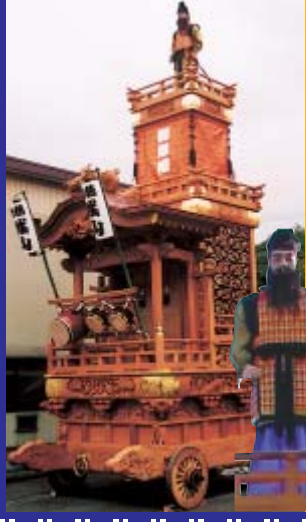
湧玉松山組



磐穂水の花連



磐穂神田組



磐穂城山組

坂上田村麻呂